

滋賀県立近代美術館協議会(第35回)概要

1 開催日時：平成24年(2012年)10月30日(火) 午前10時～12時

2 開催場所：滋賀県立近代美術館 会議室

3 出席者：滋賀県立近代美術館協議会委員 10名

上野真知子委員 大西健之委員 尾崎正明委員 川瀬典子委員 木村尚達委員
小谷惇子委員 辻村琴美委員 別府博委員 三原サダ子委員 吉岡千恵子委員

滋賀県立近代美術館事務局

秋山館長 菊井副館長 日野総務課長

片山文化振興課参事

宮川管理監(「美の滋賀」発信推進室長)

木村「美の滋賀」発信推進室副主幹

4 会議次第

(1) 滋賀県立近代美術館 秋山館長 あいさつ

(2) 議 事

① 会長、副会長の選出について

② 新生美術館の検討状況について

5 概要

(1) 会長、副会長の選出について

○委員の互選により、尾崎正明委員が会長に、辻委員が副会長に選出された。

(2) 新生美術館の検討状況について

【委員】

○古美術と近代美術を一緒に一つの建物に展示するという美術館は、私の知る限りそれほど数はないと思う。さらにアール・ブリュットを含めた3つを統合するという方向で進められたということだと思うが、おそらく、これまでの美術館運営にない取り組みになると思う。それだけに、色々な方面からの意見を聞かれた方が良いと思う。

【委員】

○年4回「M・O・H通信」という情報誌を発行している。滋賀県の文化を新しい局面で捉えて発表していく「美の滋賀」という県の動きがあるということを知り、県への取材を行ったうえで、仏教美術と近代美術、アール・ブリュットの3つを紙面の上で紹介するという新しい試みを行ったところ、読者から、「滋賀県にこんなに色々なものがあることを知らなかった。」という意見を多くいただいた。このことを通して、この3つのものが揃ってあるとい

うのは滋賀県の大きな特徴であるということを感じることができた。

- 先日、長浜城歴史博物館で開催された観音展に多くの人々が来場され、観音様の本物の美しさを地元の方々がたいへん愛しておられることを目の当たりにした。仏様のなかに、かけ仏様という小さな仏様がおられ、ガンダムのようなミニチュアを作っておられるアール・ブリュットの作家さんの作品のテイストとよく似ているという新しい発見もできた。また、アール・ブリュットのフィギアの作家に、フィギアの衣のひだは仏像様の衣のひだを参考に行っていること、仏像様が技術の師であるということも聞き、分野は異なるが、琵琶湖を中心とした何か精神的な祈りというか、精神的なつながりがあると感じた。近代美術の収蔵作品の中にも、野口謙蔵の絵の中にかばたで洗いものをする人の姿があったり、外国の作家の作品の中には祈りをテーマとしたものがあったり、私の中では精神的なところで、それら3つのものが関連していて、そういうものを残していくというのが、この新生美術館の大きな役割で、後世に、子供たちにもそうしたものを見てほしいという強い思いがある。先ほどの意見にもあったように、今までにはない美術館を創れるかもしれないという未来に対する大きな希望が私の周りにはある。アール・ブリュットの作家も作品を近代美術館で皆さんに見ていただけることをうれしく思っておられる。また若い芸術家のひとつの登竜門としての役割も果たせるようになればと思う。後世に残す美というのは非常に大切だと思う。是非、こういう計画の中で進めていただきたいと思います。

【委員】

- 外から見た滋賀のイメージは、古い伝統文化のある、仏教美術の豊富などところというものであると思う。個人的な見解としては、多目的にしすぎるよりも、歴史性とか伝統文化に特化した方が対外的には発信力があると思う。アール・ブリュットについては、東京など大都市圏でも見るところが相当あるので、滋賀にわざわざ来られるのかなという感じがする。滋賀県には隠れた良いものがたくさんあるところなので、そういうものを核に据えたほうが良いのではないか。近代美術館というよりも歴史美術館的なイメージの方がふさわしいような気がしている。たとえば、鹿児島に黎明館という、明治維新を中心とした歴史遺産を中心に展示しているところがあるが、東京や大阪から来られるとすれば、そういうものを求めて来られるのではないか。挙げられている3つのものは、それぞれ地元にとっては大切なものであるかもしれないが、この美術館として対象とすべきかどうかは慎重に考えた方が良いのではないかと思っている。

【委員】

- 写真のデジタル化により、失敗なく写真が撮れるようになったこともあり、団塊の世代、また若い人の中でも、レジャーとして写真を始める人が増えている。こうした写真に対する需要の増があるにもかかわらず、作品を発表する場がなく、また、芸術的に優れた作品を保管する施設が日本にはまだまだ少ない。アナログの時代は、ネガの保管ができなかったが、デジタル化の時代となって、保管ができるようになった。失われていくデータを保管していく、そうした機能をこの新生美術館に取り込んでもらえないか。また、写真の展示に適した施設もあればと思う。

【委員】

- 少し欲張りすぎではないか。柱を多く立てて、方向性の定まらないものになってしまうのではないか。計画として、言葉としては良くまとまっているが、本当に進められるのか、と思ってしまう。

【委員】

- 新生美術館の利用者数の目標が、現状の倍以上にされているが、少し見込みすぎではないか。
1・5倍ぐらいになれば良いところではないか。整備計画を立てるうえで、ある程度の集客の増を前提にしなければならぬということもあるかもしれないが、県民に期待感を持たせすぎることにならないか。

【委員】

- 今の近代美術館では今後の展望が見えないというスタンスに立って、これからどうするのかということなのか、あるいは今の近代美術館の基本的なコンセプトを継承したままで何とかやっていこうかということなのか。現状では、滋賀県立近代美術館というものを改めていかなければならないという状況にあるなら、次のステップとして必要なものであると考えられるが、そのあたりはどうなのか教えていただきたい。

【事務局】

- 昭和59年当時の記録を読んでいると、県民の文化意識を高めるためというような、啓発的な意識の強い中でこの美術館は建てられている。しかし、現在、県民の皆さんに、美術館に求めるものを聞くと、もっとコミュニケーションができる、あるいは人間の可能性に触れられるというような意見をいただく。もっと参画できるような場としての美術館が求められているものと思っている。その一方で、滋賀県の良いものを誇りとし、その誇りをよその人に認めてもらえる、あるいは訪れてもらえるような品格のある滋賀県というものも求められている。そのためには、この美術館を核にしながら、さらに仏教美術であるとか滋賀県に作家のたくさんいらっしゃるアール・ブリュットという滋賀の特徴的な美術の拠点と併せ持つ滋賀の美のセンターが必要と考えられる。県民も誇りに思うし、よその人も訪れてくれる、そういう広場のような空間を創って行きたいというのがこの計画の基本的な考え方になっているので、行き詰ったので次の段階に行こうということではない。

【委員】

- 琵琶湖文化館の収蔵品には、1点だけでもたくさんのお客さんが集められる名品が揃っていると聞いたことがある。琵琶湖文化館が閉館され、どうされるのかと思っていたが、それらの収蔵品をここに持ってくるということかと感じている。私自身の感覚では、仏教美術と近代美術は相いれないものとは思わない。自然にいろいろなものを見ていけるという感覚に立った方が良いのではないかと思う。自分の好きなものを好きだと言える子どもに育てたいと考えているので、色々なものに触れ合うことが必要かと思う。専門的な立場から分けるのではなく、むしろ一般的な人からのスタンスがこれから必要になるのかと思う。私自身としては、この計画に描かれているようなことができれば素敵なことであると思う。

【委員】

- 滋賀県には本物が多くあると思う。会社の若い人を長浜の観音様を見に連れて行ったところ、本物を見るとやはり美しいと感動する。近代美術館で作品を見ても、やはり感動すると言う。滋賀県には本物がいっぱいある、その本物を若い人が目の当たりにして、それをどういう感受性で受け止めるのか、その反応を見るのがおもしろい。歴史や文化という、それぞれの分野のスタンスや品格を保ちつつ、滋賀県の本物を若い人に見てもらって、それを後世に伝えなければならないという認識を持ってもらうことが滋賀県を

愛する心になるのではないかと思う。その愛する心があるということは、他府県から来られた人にも感じてもらえるのではないか。やはり、本物を見ていただくことが、観光面でも、滋賀県という県を認識していただく一つの大きな要因になるのではないかと考えている。

【委員】

○神と仏の美については、過去の展覧会においても入館者数の実績がある。アール・ブリュットも滋賀県には歴史があり、次の世代を育む若い世代のお母さん方にとっては、子供たちに見せたい貴重なものだろうと思う。近代美術館は、現代美術を中心とした価値のある美術館であるが、少し敷居の高い、興味のない方にとっては遠い存在であることは否めないと思う。そこにこの神と仏というものとアール・ブリュットを付け加えられるということになれば、間口が広まって、美術館のバリューが高まるのではないか。また、それらと同時に、バス停からの案内や駐車場の問題といったアクセス面の改善と、また、広い年代層にアピールする広報への取り組みが重要であると思う。金沢21世紀美術館は、建物の開放感とともに広報力の魅力により成功している。もし、新館を考えられているなら、金沢21世紀美術館の成功を参考に、美術館に足を運んでもらえるよう、人の動かし方を研究されたい。

【委員】

○奈良や京都はアピール力が強い。滋賀は埋もれている感がある。奈良や京都を訪れた人のうち、滋賀にまで足を延ばそうとする人は少ないと思う。もう少し広い意味でのアクセスについても考えていくべきだと思う。滋賀県は本当に魅力ある県であると思うが、それらがあまり知られていない。知る人ぞ知るということになっている。この美術館がセンターとなって、そのような取り組みがなされれば、県内の他の美術館にとっても相乗効果を生むことになると思う。

【委員】

○近代美術館には、どのようにして来れば良いのわからないという方が私の周りには多い。たとえば、京都駅や大津駅から、近代美術館行のバスが出るなど、どこかに行けば安心して迷わず近代美術館に着けるということになればと思う。道路標識も、龍谷大学を案内するものはあるが、近代美術館を案内するものは見当たらない。

【委員】

○バス停に降りたとき、殺風景で、ウェルカムな感じがない。来れば、静かで落ち着いた良い場所ではあるが、若い人や、子ども連れのお母さんが来たときに、もう少し楽しそうな空気を感じられるようにならないものかと思う。

【委員】

○ここは、わくわくしないで、不安になる。ディズニールランドなどは、近づくにつれ、わくわく感を高揚しつつ、知らない間に着いていたというところがあるが、ここは、近づくにつれ、本当に美術館があるのかという不安な気持ちになってくる。もう少し、看板やのぼりといった、目につくものがほしい。

【委員】

○対象年代をもう少し低めに設定されても良いのではないか。

【委員】

○北九州市立美術館のアプローチには、彫刻が並んでいる。あのようなアプローチができないか。入口から近代美術館までのアプローチは、わかると言えばわかるが。

【委員】

○わかると言えばわかるという感じである。静かで良いなあとは思いますが、子ども連れのお母さんたちは、そうでもないだろうと思う。

【委員】

○新生美術館の誘客の年齢層をどのあたりに絞っておられるのか。美術鑑賞に興味のある方は、40歳代から60歳代ぐらいで60パーセント程度を占めているのが現状であると思う。これから少子高齢化社会になり、若者が少なくなってくるが、これまでと同様の誘客を考えるなら、誘客の対象を若者へシフトする部位もあってしかるべきではないかと思う。レジャー白書には潜在的な需要が掲載されているが、美術館へ行きたいけれど行っていない人は2パーセントぐらいしかない。多くは、パソコンや映画や音楽鑑賞といったものが占めている。美術鑑賞に興味を持つ若者づくりがこれから必要になってくるのではないか。

【委員】

○次の世代に繋げていく、子どものときから親しんでもらうということが必要かと思う。

【事務局】

○そのあたりのことも考え、展覧会の企画もしている。このところ、毎年、絵本原画やその系統の展覧会を行っている。今年も、チェブラーシカ展については、全く観客者層が異なった。通常は50歳代から60歳代の層が多数を占めるが、チェブラーシカ展については、20歳代、30歳代であった。また、関西ではここでしかやらないということから、京都、大阪からの観客も多く、アンケートにも、何としてもチェブラーシカを見たいので来館したとの記載が多かった。また、アンケートを記載される方の割合も多く、それはやはり、若い人、子ども連れの方が多かったということからであろうと思われる。美術館のあり方ということもあるが、展覧会の内容次第で、若い人を引き付けることもできると感じている。そうした工夫も引き続き考えていきたい。

【委員】

○これから若者を取り込もうとすると、ネットが大きなツールになるかと思う。ネットのアクセス数が増えるような、ネットでも参加ができるような、何かおもしろいネットの使い方を企画されてはどうか。来場者という人数の取り方に加え、アクセス数という人数の取り方ができ、間口が広がるのではないか。

○また、以前、北九州市立美術館に行ったときに、照明の仕方でこれだけ美しさが違うのかという認識を持った。照明の当て方にも気を付けていただくと、感動ももっと大きなものになるのではないかと思う。

【委員】

○3つの部門をやろうとすると、人材の確保が必要となり、それに伴う人件費や施設、収蔵品の管理費、修復等、メンテナンス経費を相当必要となる。そうした財政的な負担に耐えられるのかということと、大阪市の橋下市長ではないが、それに見合う魅力あるものができるのかということになると、議会からの質問があることも考えると、相当心して取り組まないと

ならないのではないかという気がする。

【事務局】

- それは、全くそのとおりである。建物だけ造っても仕方なく、それをメンテナンスしていく、あるいは、その建物を使って良いプログラムを提供していくということが一番大事だと考えている。そこで金を出し惜しみするぐらいなら、初めから手を付けない方が良いのではないかとさえ思えるぐらいである。まずは、スタッフの問題、それと年々の運営費の確保というのは、初めからこれぐらいは必要になるとの考え方をもって、しっかりと説明をして、議会の理解も得て、予算を獲得していかなければならないと考えている。

【委員】

- 以前、ギャラリーを借りて、グループ展を開催しようと思ったときに、アクセスのことが問題になった。お年寄りの方は、誰かに送ってもらわないと来れない方が多く、日や時間が合わなく、来てもらえないということになった。やるからには、多くの人に来てもらいたいので、ここを借りる場合、どうしてもアクセスの問題で躊躇してしまうところがある。アクセスの改善が一番必要ではないかと思う。

【委員】

- 県内の作家たちがなかなか育たない、また、意欲のある人が京都や大阪に出て行ってしまいうという状況があり、そうした人たちを育てなければならぬということから、近代美術館ができる前であるが、現代彫刻展の開催などの試みがされたと思う。そうしたコンセプトが、近代美術館が建って以降、どうなっているのか気になっている。また、県内の作家たちには、身近に発表できる場がないということもあり、近代美術館の今までの柱が埋没してしまわなようにしてほしいという気持ちを持っている。
- それから、滋賀県美術展覧会を近代美術館で開催しているが、場所が狭いため、前期と後期の2期に分けなければならないという状況がある。新生美術館ができれば、同時に開催できるようにならないかと期待している。
- また、ここは、文化公園として整備され、整然としていて、きれいで、静かで落ち着きがあるが、親しみが持てないところがある。美術館があり、図書館があり、埋蔵文化センターがあり、茶室があるという中、若い人が、ちょっと遊んで帰ろうかというような雰囲気がない。公園全体を美術化するようなことができないか。美術館の周りに少しあるが、公園全体の中に美術品があれば、もっと親しみが持てるようになるという気がする。人を寄せ付けるような場の設定ができないかと思う。
- 最近、子どもたちを集めて、いろいろな企画をされているが、たいへん良い傾向であると思う。子どもたちが、あそこへ行けば、ああいうことができる、あんなものも見られる、勉強もできる場として認識するようになれば、大人になっても来れると思う。盛りだくさんかどうかという意見もあるが、いろいろ楽しめるゾーンになればと思う。

【委員】

- 今、教育委員会では、「うみのこ」、「やまのこ」、「たんぼのこ」という取り組みがされているが、どうして「美のこ」がないのかと思う。小学生のときに、近代美術館のようなどころに、必ず1回は行って、何かを作る、何かを見るという体験をするという取り組みがどうしてないのか。楽しい思い出があれば、大人になっても自分の子どもを連れて来られると思う。是非、教育委員会と連携を取って、そうした取り組みをしてほしい。

【委員】

○ここに来るアプローチは、歩きやすくて良いが、芝生にして、何か広場のようなもっと開放感のあるアプローチがほしいと思う。ゾーン全体の計画として何とかならないかと思う。

【委員】

○何か角ばったものではなく、ここに来れば、何でも自由にでき、自由な想像力をかきたてるようなところになれば、他府県からも来てもらえるのではないか。

【委員】

○何か、おすまししている美術館みたいな感じがする。

【委員】

○ここに来れば、お行儀よくお茶室を通って、ぐるっと回って、鑑賞したあと、食べるところがないので空腹を抱えて歩いて帰るという感じがある。

【事務局】

○いろいろご意見をいただいたが、それぞれについて、考えているところを述させていただきたい。まず、3本柱の議論については、ずっと理解いただけることは少なく、話をしていくと、「全部滋賀にあるものだからやっても良いのでは。」というような理解をいただけるというところである。外部の識者による検討会での議論においては、「近代社会の周辺にあるようなものばかりで、それらを問いかけるものだ。」と哲学的に説明したり、あるいは、「人間の表現の多様性、根源性というものを強調している。」と言ってみたりしたが、結局、最後には、「滋賀に来たら、それだけ良いものがあるのだから、それで良いのではないか。」と、「良いものがたくさんあるんだから、それはそれで、混ぜるとかあるいは統合するとか、そういう考え方を無理にしなくても、別のものとして守っていく、それで良いのではないか。」というような議論になった。欲が深いという意見も頂いたが、そうした議論に力を得て、欲深くやって行きたいと思っている。

○また、美術鑑賞をもっと若者にしてもらうべき、あるいは子どもに開放的に見てもらうべきという意見は、そのとおりだと思う。屋外での展示、あるいは、子どもたちへのプログラムを用意するというところを含めて検討しているところであり、ハード、ソフト両面でやって行きたいと思っている。次の世代の鑑賞者を育てるようなプログラムを提供していきたいと思っている。

○それから、アクセスの問題は、必ず美術館の議論では出る問題である。皆様も言われるとおり、物理的アクセスというよりは、むしろ、瀬田駅から本数だけは出ているがバスを降りてからが行きにくい、あるいは瀬田駅に降りても美術館がある雰囲気がない、といった心理的アクセスというものもたいへん大事かと思っている。

○また、その前に、もっとここに来てもらうようにすることが大事だと言われた方があったが、それは広報とかマーケティングの話だと思う。今回の組織設計の検討においては、広報・マーケティング部門を設けたいとして、その位置づけを行っている。

○それから、県内作家の育成という役割が、この美術館にはあつたはずだという意見もいただいたが、我々もそのとおりだと思っている。議論が3本柱に傾きすぎたところがあったので、今回の計画を検討する中で、若手作家、あるいは県内作家の位置づけをもう一度見直した。詳しく読んでいただければご理解いただけると思うと認識している。

○また、公園全体を考えて、美術館化あるいは少なくとも解放的にすべきだという意見をたくさんいただいているが、この都市公園を所管するセクションでは、この機会に公園全体を見直し、

美術館を核にしたいろいろな機能を持つ公園にしていきたいと考えてので期待していただければと思う。

- 滋賀県美術展覧会の2期開催の問題については、資料の6ページに、「県美術展覧会の開催に際して、すべての作品を一度に展示できる場を提供する」と明記しており、その計画で検討していきたいと思っている。
- 全部のご意見には答えていないと思うが、いろいろな意味でたいへん貴重なご意見をいただき、これからの計画づくりの中で生かさせていただきたいと思っている。

【委員】

- 近代美術館機能・発信力強化検討委員会での議論と同じような意見が出た。やはり、それは、皆さんが思っておられることだと思う。是非、実現できるようにしていただきたい。検討委員会の中には、立ち消えになってしまうのではないかという不安があったが、ちょっとずつ明かりが見えてきたような気がしているので、よろしくお願ひしたい。
- アール・ブリュット、仏教美術、近代美術の3本柱は、ものをつくる立場の者としては、ヒントをもらえたり、勉強になる場を一度に提供してもらえるとということになり、すごくうれしいことだと思っているので、欲張りすぎという意見もあったが、是非そういう方向でやっていただきたい。アール・ブリュットの作家さんが仏像をヒントにされているという話もあったが、私たちも、仏像の手とかがヒントになったり、屏風の日本画の表現みたいなのが勉強になったりすると思うのでよろしくお願ひしたい。

【委員】

- 仏像とかアール・ブリュットは、商品展開が考えられる分野ではないかと思う。アール・ブリュットなら鹿児島にしょうぶ学園というところがあって、そこでは服とか陶芸作品、木工作品とかを展示とショップの一大ゾーンを作って成功されている。仏像も昨今人気なので、何か商品展開に持っていければ、少しはランニングコストの足しにできるのではないかと思う。

【委員】

- 来場者の皆さんは、仏像のお顔や絵画のお顔を見ておられると思う。良い笑顔のお顔などを商品展開できないかと思う。
- 美術に関心のある県民の方から、「『美の滋賀』は怎么样了のか。動いてないのか。」、「発表しただけで、何もしていないのか。」と、聞かれることがある。そのあたりの経過の説明をもっとお願ひしたい。

【委員】

- ミュージアムショップが、奥の方から前の方に出てきて、場所を変えるだけでも雰囲気が変わる。そうした工夫もよろしくお願ひしたい

【委員】

- 美術館を入れた校外学習の計画を立てようと思うが、子どもたちをこの美術館に連れてくると、怒ってばかりになるだろうと思う。楽しく活動できるようなスペースが次の美術館では生まれればありがたいと思う。

【事務局】

- 近辺の小学校などは、ひとつの学年全員が来くることもあり、そうした場合は、20ぐらい

のグループに分かれて、サポーターが案内するというのもやっているの、是非来ていただきたい。

【委員】

- 建物とか事業をどうするかということは、机の上で考えられることで何とかなることだと思う。一番問題になってくるのは、建物が建った後、事業展開をしていくうえで、やはり、人と金というものがどうしてもついてくる。よく見られるケースで、できあがったら建物と、こういうことをやるという事業数だけが残され、人が全然ついてこないということがある。残された人間が、休みも取らずに仕事をする、また、本当は100やりたいが50ぐらいしかできないという状況に置かれてくるということが多々あると思う。建物を建てる、新たな組織を作るときに際して、ランニングコストなり、人との、それから事業費との見合いを見ながら進めていっていただきたい。また、美術館というものは生き物であり、運営していく中で成長し、歴史を積み重ねていくものなので、そうしたことについて、今後、話を進めていくうえで、くれぐれも留意していただきたい。ここでのアクセスの問題などは、新しい美術館ができるできないにかかわらず、すでに抱えていた問題である。それが新しくなるというところで、一気に整理しておきたいということだと思うが、一番の問題は、建物、組織、事業ができたときに、それに対して、どれだけ人員の手当てができ、お金の手当てができるのかということである。そのところは、本当にそんなに人が入るのかというような意見もあったが、入場者の見込みも含めながらよく考えていただきたい。